

# 南庄遺跡出土素文鏡について

脇山佳奈\*

\*徳島大学埋蔵文化財調査室

## はじめに

徳島市南庄町南庄遺跡は、鮎喰川水系の旧河川の沖積作用によって形成された標高 5 ～ 6 m の微高地上に立地する弥生時代・古墳時代を中心とする集落遺跡である。周囲の遺跡としては、北に庄遺跡、東に南蔵本遺跡、西に鮎喰遺跡、名東遺跡が位置する。

南庄遺跡では、1994 年のマンション建設による調査（第 1 図 e）で、溝 SD05 から素文鏡 1 点が出土している（三宅 1995）。本遺跡出土素文鏡については、これまでに論文等で取り上げられることが少なく、あまり注目されていなかった。今回、この素文鏡を実見する機会を得たため、類例との比較を行い、製作時期や出土遺跡の種類について検討を進める。最後に本遺跡出土素文鏡のもつ意義についても論じることとする。

## 1. 南庄遺跡の概略

南庄遺跡の調査は 1981 年から始まり、1985 年からは 4 年にわたって南庄・南佐古線における調査（徳島市教育委員会編 1986 ～ 1989、第 1 図 b）が行われた。1985 ～ 1988 年の調査では、総面積約 6,700 m<sup>2</sup> に及ぶ調査区から、弥生時代、古墳時代、平安時代の集落跡が確認されている。最も古い時期の遺構は弥生時代前期中ごろで、土坑や堀が確認されている。弥生時代中期後半～後期前半の遺構としては、東西の微高地上に計 19 棟の竪穴住居跡が確認されている。微高地に挟まれた低湿地に形成された自然流路からは、弥生土器・石製品・鉄剣・銅鏃・勾玉・管玉・ガラス玉が出土している。古墳時代の遺構は西側の微高地上で確認され、竪穴住居跡 7 棟、堀立柱建物跡 5 棟、河川跡 3 条が検出されている。遺物は 6 世紀前半～7 世紀前半の須恵器・土師器・鉄製小刀・轡・管玉が出土している。平安時代の遺構は東側の微高地上で確認されている。

1987 年には、徳島家畜保健衛生所の建替えに伴う調査（森編 1989、第 1 図 c）が行われ、土坑や自然流路、弥生時代中期前半の溝、弥生時代中期前半～古墳時代初頭の遺物が確認されている。

1991 年の住宅開発に伴う調査（勝浦 1989、第 1 図 d）では、弥生時代、中世の溝が確認されている。

1994 年のマンション建設工事に伴う調査（三宅 1989、第 1 図 e）では、弥生時代前期後半の土器溜り、弥生時代中期後半の竪穴住居跡、古墳時代後期以降の溝が数条検出されている。

2007 年の調査（大橋・木村編 2010、第 1 図 f）では、弥生時代後期の溝状遺構と自然流路、古墳時代後期の竪穴住居跡・土壇・溝状遺構、古代の溝・自然流路・堀立柱建物跡が確認されている。自然流路 SR1004 は南岸のみが調査区内で、この南岸に沿って集石遺構が検出され、その周囲には斎串・



(南庄遺跡)

a 小川マンション地区 b 南庄・南佐古線地区 c 家畜保健衛生所地区 d 住宅地区 e マンション地区 f 庄名東線地区

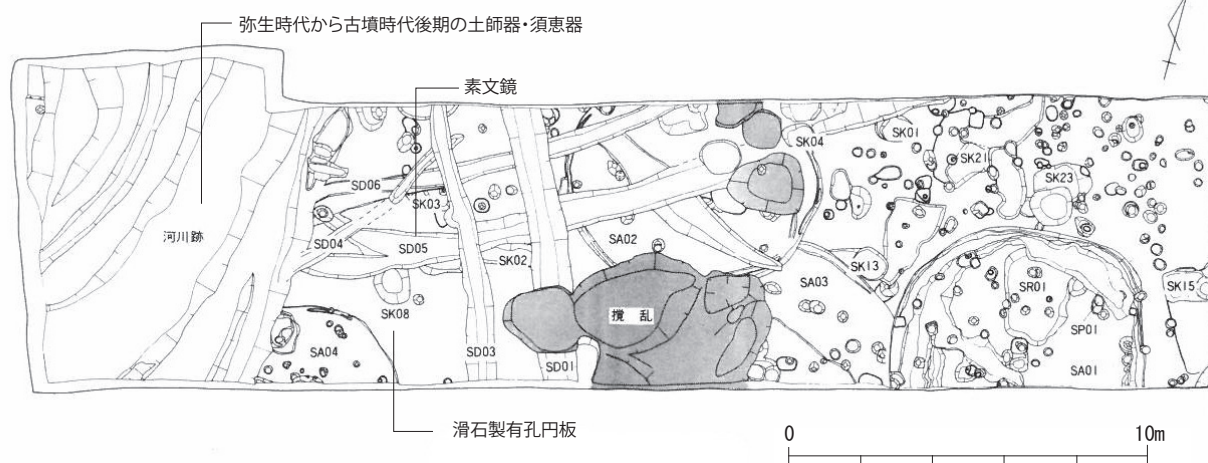
第1図 南庄遺跡調査地点

徳島市全図1・2 (徳島市国際航業株式会社調整より引用・改変)

鹿骨などの有機物が残存する。集石の時期は10世紀以前と推測されている。以上が南庄遺跡の遺構・遺物の主な内容である。

素文鏡は、1994年のマンション建設工事に伴う調査にて溝SD05から単独で出土している(第2図)。SD05は河川跡と土坑SK08を切ると報告され、河川跡からは弥生時代から古墳時代後期の土師器・須恵器、SK08からは滑石製有孔円板1点が出土している。SD05の時期については古墳時代後期以降と





第2図 素文鏡出土遺構（三宅 1995 より引用・改変）

判断されている。その後の祭祀遺物を集成した図録（徳島市考古資料館編 2008）では、古墳時代の鏡として報告されており、筆者も古墳時代の鏡と考えている。

## 2. 素文鏡の研究史

南庄遺跡出土鏡について検討する前に、素文鏡の分類と意義に関する研究についてまとめ、その問題点を整理する。

### （1）分類に関する研究

今平利幸・今井堯・小野本敦の研究があげられる。今平利幸は栃木県茂原古墳群の報告で古墳時代から古代の素文鏡を検討している（今平 1990）。素文鏡の鈕を「A 類 太い鈕（平面形が円形および長方形）、B 類 扁平な鈕」とし、縁を「I 類 三角縁もしくはそれに近いもの、II 類 平縁もしくはそれに近いもの」とに分け、鈕と縁を組み合わせる素文鏡の分類を行った。古墳時代前期は A II 類が多く、中期に全ての分類がそろい、後出するものほど B 類の扁平な鈕が増えると指摘する。

今井堯は中・四国地方の古墳時代小型仿製鏡の研究を行い、その中で素文鏡の分類を行っている。完全に無文のものを素文鏡 1 類、内区無文のものを素文鏡 2 類とした（今井 1991）。

小野本敦は古代の素文鏡を中心に考察している（小野本 2013）。素縁で、鈕が板状のものを A 類、三角縁で、鈕に厚みがあるものを B 類としている。A 類は鈕孔を穿孔し、B 類は范に中子をおいて鈕孔を製作すると指摘している。さらに A 類は鈕と鏡面の接合方法に基づいて A1 式～A4 式に細分している。A1 式・A2 式は鈕と鏡体を一体で製作し、A2 式は A1 式より反りが弱いとする。A3 式・A4 式は鈕と鏡体を別々に製作し、A3 式は接着、A4 式は挿しこみで接合させると述べる。また、古墳時代の素文鏡と古代の素文鏡の関係については、古墳時代と古代の素文鏡とは製作方法が異なることから、直接的な繋がりがないと推測している。

## (2) 意義に関する研究

近藤滋・高倉洋彰・林正憲・今井堯・小野本敦による研究があげられる。高倉洋彰は弥生・古墳時代の小型仿製鏡が儀鏡化する過程について論じている。弥生時代の重圏文日光鏡系仿製鏡第Ⅲ型b類から、重圏文鏡・櫛歯文鏡・素文鏡の順で出現すると述べる。素文鏡などの4cm以下の小鏡の儀鏡的性格は弥生時代に準備され、古墳時代に入ると副葬品とは別の祭祀具としての性格をもつ鏡として定着したとする（高倉1995）。

林正憲は素文鏡・重圏文鏡・珠文鏡の検討を行い、庄内期から古墳時代前期は、これらの3鏡種は「素文鏡<重圏文鏡<珠文鏡」という関係で副葬品として選択されていたと考えている。ただし、いずれも古墳・集落・祭祀など様々な遺構から出土することから、選択の際に厳密な区分が行われていなかったと指摘する。古墳時代中期以降は、重圏文鏡が激減する一方で、珠文鏡・素文鏡の出土例が増加し、珠文鏡は古墳からの出土率が9割となり、素文鏡は集落および祭祀遺構からの出土率が著しく増加すると指摘している（林2005）。

今井堯は、素文鏡・重圏文鏡・珠文鏡は、大和・近畿部族同盟体からの配布によるものとする。副葬位置をみると頭位横をはじめとして、頭位周辺ないし胸部周辺が圧倒的多数であると指摘し、これは中国鏡や大型・中型仿製鏡とも同様の傾向であることから、小型仿製鏡の中の極小鏡もランクの低さは別として、権威のシンボルとして用いられたものであると述べている（今井1991）。

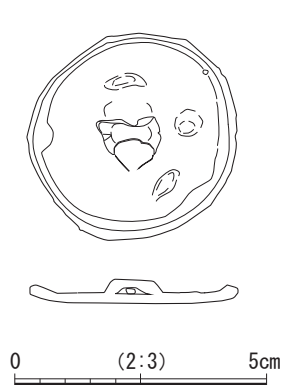
近藤滋は鳥取県長瀬高浜遺跡の報告で、素文鏡のみが単独で出土する事例には祭祀遺跡が多いと述べる。さらに奈良時代の石川県寺家遺跡や福井県松浜客館跡遺跡からも素文鏡および小型鉄鏡が出土することから、古代の素文鏡を用いた祭祀形態が古墳時代のものを引き継ぐ可能性を指摘する。また、この2遺跡は日本海沿岸の砂丘部に遺跡が立地する共通点から海への祭祀の可能性を述べている（近藤1980）。

小野本敦は古墳時代の素文鏡の特質について論じており、前期は集落内からの出土例が多く、中期以降になると集落から離れた祭祀遺跡からの出土割合が増加し、中期の遺跡には福岡県沖ノ島遺跡が含まれると述べる。中期になると素文鏡の出土する場所に変化があることから、時期差による遺跡の違いがあるのではないかと指摘する（小野本2013）。

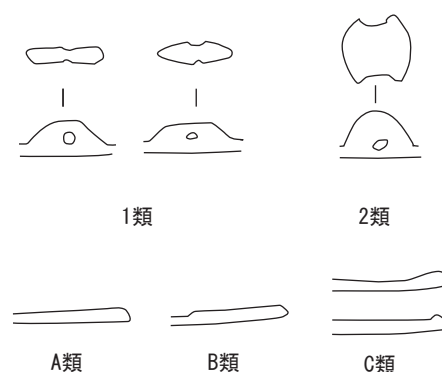
素文鏡の出土地点から儀器に特化した鏡とする意見や、古墳からの出土例を評価し、大型鏡や中国鏡と同様に権威のシンボルとして配布されたという意見もある。この点については、素文鏡の分類ごとの検討が必要であろう。また、古墳時代の素文鏡と古代の素文鏡とは関係があるのか否かという点も意見が分かれており、再検討の必要がある。

## 3. 南庄遺跡出土鏡の紹介

ここでは、南庄遺跡出土鏡の特徴について述べる。鏡面・鏡背面は褐色を呈する。全体的に鋳あがりはやや悪く、第3図の実測図右上では巣がみられる。鈕の周辺に直径5mm、高さ0.5mmほどの高まりが数か所みられるが、不明瞭であり文様であるのか否かを判断することはできない（第3図）。鏡面は研磨されている。文様を確認できないので、鏡式は素文鏡とする。



第3図 南庄遺跡出土素文鏡  
(徳島市立考古資料館所蔵、筆者実測・写真撮影)



第4図 素文鏡の分類  
(筆者作成)

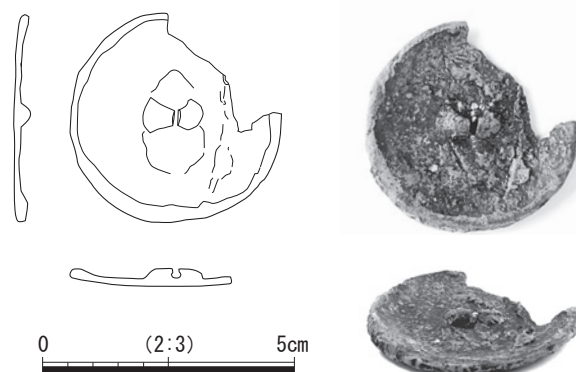
鏡の面径は4.13～4.16 cmと正円ではない。鏡の厚みは2 mm弱である。反りは2mm、重量15gである。錆のためか縁は全体的に剥離している。縁の端部は斜縁状に突出し、縁は厚さ2.7～3.1 mmである。鈕は鼻鈕である。鈕は長さ1.2 cm、鈕は中央で幅約3 mm、端で幅5～6 mmである。鈕の高さは鏡背面から約2 mmで、鈕の上面は扁平である。鈕孔は幅1.5 mm、高さ1.0 mmである。

本鏡は今平利率による分類のBⅡ類である。筆者も鈕と縁によって素文鏡の分類を行った(第4図)。鈕は2つに分け、鼻鈕1類、円鈕2類とした。縁は3つに分類した。外区はなく、平縁のものをA類、外区があり、平縁のものをB類、外区はなく、縁が斜縁状や三角縁状に突出するものをC類とした。鈕と縁の組み合わせのうち確認できるものは、1A類・1C類・2A類・2B類のみである。本遺跡出土例は1C類に相当する。なお、1C類は5遺跡7面を確認している。

#### 4. 類似する資料

本鏡の特徴は正円ではないこと、縁が突出すること、鏡背面が研磨されていないこと、鈕が鼻鈕となることである。筆者は1C類の中でも特に本鏡と類似する素文鏡として、岡山県下湯原B遺跡出土例、静岡県洗田遺跡出土例を提示する。大谷古墳例については平面形が正円で、縁は三角縁状に近いことから、先に提示した3面とはやや異なると考えている。以下、岡山県下湯原B遺跡、静岡県洗田遺跡とそれぞれの鏡の特徴について紹介する。

**岡山県真庭市下湯原B遺跡**(第5図) 下湯原B遺跡(内藤編2002)からは古墳時代後期の堅穴住居跡、奈良時代・中世・近世の遺構や遺物が確認されている。素文鏡1面は、堅穴住居跡9の南西隅の覆土から出土している。ほ



第5図 下湯原B遺跡出土素文鏡  
(岡山県古代吉備文化財センター所蔵、筆者実測・写真撮影)

かには土製模造鏡・須恵器・土師器が出土している。竪穴住居跡9の年代は出土遺物から6世紀後半と報告される。また、竪穴住居跡9は竪穴住居跡10に切られている。竪穴住居跡10からは、土師器・須恵器・手捏ね土器が出土しており、所属時期は、6世紀末～7世紀と報告される。

素文鏡の実見・観察を行っている。一部は欠損しており、一部錆におおわれている。鏡背面に研磨はみられず、わずかに凹凸がみられるが、文様か否かは判断できない。鏡の面径は4.10～4.15 cmであり、正円ではない。縁の厚みは2.4～2.8 mm、反りは1 mm、現重量9 g、鈕孔径は1 mm程度である。縁は斜縁状に突出している。

**静岡県下田市洗田遺跡** 洗田遺跡は三倉山山麓に位置する祭祀



遺跡である（大場ほか1938、堀田・川合1939）。A～C地点の調査が行われ、C地点北側斜面の地下10 cmの所から単独で素文

第5図 洗田遺跡出土素文鏡 (S=2:3)  
(堀田・川合1939より引用)

鏡1面が出土している。全調査地点の出土遺物としては、滑石製有孔円板・滑石製勾玉・滑石製剣形品・滑石製白玉・滑石製管玉、土製模造鏡・土製勾玉・土製丸玉・土製管玉・土製円板・手捏ね土器・須恵器・土師器・鉄器片・珠文鏡がみられる。遺跡の所属時期は5～6世紀と報告されている。

素文鏡の面径は4.3 cmである。鏡の平面形は報告書等で見ると限り、正円ではなく、一部欠損している。鏡背面の研磨は確認できず、わずかに凹凸がみられる。縁は断面図（第5図）では斜縁状に盛り上がっている。

3遺跡の時期を比較すると、岡山下湯原B遺跡は6世紀後半と報告され、静岡県洗田遺跡は5～6世紀と報告されている。南庄遺跡は6世紀以降であることから、これらの2遺跡の時期と近い時期と考えられる。以上のことから、縁が突出する素文鏡1C類については古墳時代中期から後期の時期に収まると判断できる。

鏡の面径を比較すると、これらの素文鏡は面径4.1～4.3 cmの間に収まることに注目したい。出土地域が異なる3面ではあるものの、縁の形状と面径が類似することから、同じ工房で製作された可能性を指摘しておきたい。

ここで南庄遺跡の位置する四国地方から出土した素文鏡を紹介すると、愛媛県高橋仏師2号墳例と香川県居石遺跡例の2面を挙げることができる。前者は鼻鈕で平縁の1A類であり、後者は円鈕で平縁の2B類である。四国地方において南庄遺跡出土例と類似する資料は認められないことを指摘しておきたい。

## 5. 南庄遺跡出土素文鏡の意義

先述したように素文鏡の鈕は2種類に大別できる。一つは鼻鈕、一つは円鈕である。鼻鈕の素文鏡は、平縁となる1A類と、南庄遺跡のように縁が突出し、斜縁状や三角縁状となる1C類とに分かれる。1A類は13遺跡21面であり、1C類は5遺跡7面を確認している。

出土時期については素文鏡1A類は、鳥取県青谷上寺地遺跡例において弥生時代後期の出土事例がみられるのに対して、1C類は古墳時代中期～後期の洗田遺跡例が最も古い事例となる。このことから、縁の突出しない1A類の方が古くから生産されている形態であり、その後、縁が突出する1C類が派生



したと考えられる。なお、円鈕の2類は古墳時代前期から確認され、中期になると減少し、後期にはほぼ見られなくなる。

鼻鈕の素文鏡の出土遺跡の種類を確認すると、縁が突出する1C類は、5遺跡のうち1遺跡は古墳で、4遺跡は祭祀遺跡・集落遺跡である。平縁の1A類の出土遺跡については、13遺跡のうち2遺跡は古墳で、それ以外の11遺跡は祭祀遺跡・集落遺跡である。以上のことから、鼻鈕の素文鏡については、最終的にその多くは墓の副葬品とはならず、祭祀遺跡・集落遺跡において使用され、廃棄される遺物として認識されていたと判断する。

古墳時代の素文鏡の中で、縁の突出する1C類は、古代の素文鏡との形態的な類似性が認められる。古代の鏡との類似点は、鼻鈕で、縁が突出する点である。さらに、筆者は、古墳時代の南庄遺跡出土鏡・岡山県下湯原B遺跡・静岡県洗田遺跡例については中子を設置していると判断しており、この特徴は、古代の素文鏡B類（小野本 2013）である石川県寺家遺跡や福井県松浜客館跡遺跡出土鏡と共通すると考えている。これらの素文鏡が面径4.1～4.6cmである点も、1C類である南庄遺跡・下湯原B遺跡・洗田遺跡出土例と共通する点である。以上のことから、奈良時代の素文鏡の一部は、古墳時代の素文鏡が祖形となる可能性を指摘したい。ただし、これらの小型の古代の素文鏡が祭祀遺跡・寺院・工房にて出土（小野本 2013）する点からみると、古墳時代の素文鏡にみられる副葬品としての機能は失われたものと考えられる。

## ま と め

今回、南庄遺跡出土素文鏡の検討を行った。本鏡と類似する洗田遺跡例と下湯原B遺跡例とを比較した結果、これら3面は、形態的特徴から同時期に同じ工房で生産された可能性を考えるにいたった。出土状況については、いずれも土壇墓や古墳から出土しておらず、集落遺跡や祭祀遺跡にて最終的に廃棄されている状況から、使用方法も共通していたと考えられる。古代の素文鏡との関係については、南庄遺跡などの古墳時代の素文鏡が、一部の古代の素文鏡の祖形となった可能性を述べた。

なお本論文は1C類を中心とした検討となっている。その他の分類や素文鏡全体の編年や意義については別稿にて述べたい。

## 謝辞

本稿は2014年9月に広島大学大学院文学研究科に提出した博士論文の一部に加筆したものである。論文作成においては古瀬清秀先生をはじめ、竹広文明先生、野島永先生からご高配賜りました。また本稿の内容は2012年度広島史学会考古部会にて発表した成果の一部であり、席上では多くの方々よりご助言いただきました。資料調査および論文執筆の過程におきましては、諸機関および多くの皆様からご助言いただきました。記して感謝の意に変えさせていただきます。岡山県古代吉備文化財センター、徳島市立考古資料館、一山 典、大栗美菜、實盛良彦、端野晋平、松尾佳子、村田昌也（敬称略、五十音順）。

## 参考文献

- 今井 堯 1991 「中・四国地方古墳出土素文・重圈文・珠文鏡—小形倭鏡の再検討Ⅰ—」『古代吉備』第13集、古代吉備研究会、1-26頁
- 今平利幸 1990 「大日塚古墳出土の小型素文鏡について」『下野茂原古墳群』宇都宮市教育委員会、177-187頁
- 小野本 敦 2013 「素文鏡考—二宮神社境内出土鏡をめぐって—」『技術と交流の考古学』（株）同成社、223-234頁
- 近藤 滋 1980 「長瀬高浜遺跡出土の小形素文鏡」『長瀬高浜遺跡Ⅲ』財団法人鳥取県教育文化財団、24-26頁
- 高倉洋彰 1995 「弥生時代小形仿製鏡の儀鏡化について」『居石遺跡』高松市教育委員会、147-163頁
- 林 正憲 2005 「小型倭鏡の系譜と社会的意義」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学研究室、267-290頁

## 参考報告書

### 徳島県南庄遺跡

- 大橋育順・木村哲也編 2010 『名東遺跡・南庄遺跡』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 勝浦康守 1995 「南庄遺跡発掘調査概要」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』5、徳島市教育委員会、15-22頁
- 徳島市教育委員会編 1986 『第7回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る』
- 徳島市教育委員会編 1987 『第8回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る』
- 徳島市教育委員会編 1988 『第9回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る』
- 徳島市教育委員会編 1989 『第10回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る』
- 徳島市教育委員会編 1995 『第15回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る』
- 徳島市立考古資料館編 2008 『古代のまつりと信仰』
- 三宅良明 1995 「南庄遺跡発掘調査概要」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』5、徳島市教育委員会、1-14頁
- 森 直樹編 1989 『南庄遺跡』徳島県教育委員会

### 岡山県下湯原遺跡

- 内藤善史編 2002 『下湯原B遺跡 藪迺山城跡』岡山県教育委員会

### 静岡県洗田遺跡

- 大場磐雄・佐藤民雄・江藤千萬樹 1938 「南豆洗田の祭祀遺跡」『考古学雑誌』第28巻第3号、日本考古学会、176-211頁
- 堀田美桜男・川合治栄 1939 『加茂郡朝日村吉佐美小字溝の上（洗田）原史時代祭祀遺蹟』静岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告第13集、静岡県